

原著論文

母校の校歌になったオリンピック：
ロサンゼルスオリンピック（1932）をめぐる牧野正蔵と宮崎康二の代表意識¹尾 川 翔 大（スポーツ危機管理研究所）²

Abstract

In a section of the school song of Washizu Elementary School in Kosai City, Shizuoka, mention is made of Shozo Makino and Yasuji Miyazaki because they both attended this elementary school and later received medals at the swimming competition of the 1932 Olympic Games in Los Angeles. Thus, they are not only representatives of Japan, but of Washizu Elementary School as well. The purpose of this study is to explore the connected consciousness of being representatives of the Japanese national team by examining the process of Makino and Miyazaki becoming medallists at the Los Angeles Olympics.

At Washizu Elementary School, which Makino and Miyazaki attended, the principal actively promoted swimming. Furthermore, Lake Hamana, which is a well-known place for swimming where several Olympic players have been nurtured, is nearby. Makino and Miyazaki attended different junior high schools, and were both selected to represent Japan, as their performances in regional competitions were excellent. They both became medallists at the Los Angeles Games, where they represented Japan.

The medals that Makino and Miyazaki won had a significant impact on Japan as well as Washizu Elementary School. The residents of Washizu watched Makino and Miyazaki during the competitions and after their return to Japan. Makino and Miyazaki participated in the Olympics with a sense of consciousness of their hometown. They were welcomed in various places after their return, including Washizu Elementary School. It appears that they were conscious of not only representing Japan but also of Washizu Elementary School.

抄録

静岡県湖西市立鷺津小学校の校歌の一節には、牧野正蔵と宮崎康二を表現する言葉がある。それは、この小学校出身の牧野と宮崎が、1932年のロサンゼルスオリンピック競技大会の水泳競技でメダリストになったことを表している。牧野と宮崎は、日本代表であるだけでなく、鷺津小学校代

¹ Olympians who Became a Part of their Alma Mater's School Song: Shozo Makino and Yasuji Miyazaki's Consciousness of Being Representatives in the 1932 Los Angeles Olympics

² Ogawa Shota, Research Institute for Risk Management in Sport

表でもある。この研究の目的は、牧野と宮崎がロサンゼルスオリンピックでメダリストになるまでのプロセスを辿ることを通して、日本代表選手をめぐる複層的な代表意識を論じることである。

牧野と宮崎が通った鷺津小学校では、校長が水泳を積極的に推進しており、近くに浜名湖もあった。浜名湖は、水泳の地として有名であり、何名かのオリンピック選手が育っていった。牧野と宮崎は、別々の中学校に進学すると、両者は地域の大会で優秀な成績を収めて日本代表に選出された。日本代表として出場したロサンゼルス大会では、彼らは共にメダリストになった。

牧野と宮崎がメダルを獲得したことは、日本だけでなく、鷺津町にも大きな反響を及ぼした。鷺津町民は、大会期間中と帰国後、牧野と宮崎の動向に注目した。いっぽう、牧野と宮崎は、郷里への意識を持ってロサンゼルス大会に出場していた。彼らは、帰国後に様々な場所で歓迎を受けた。その最後の場所は、鷺津小学校であった。彼らの意識には、日本代表としてだけでなく、鷺津町代表という側面もあると考えられる。

Keywords: Los Angeles Olympic (1932), Japan's national teams, swimming, identity, hometown

キーワード：ロサンゼルスオリンピック（1932）、日本代表、競泳、アイデンティティ、郷里

1. はじめに

静岡県湖西市立鷺津小学校の校歌には、この小学校を卒業した豊田佐吉、牧野正蔵、宮崎康二を表現する言葉がある。豊田佐吉はトヨタグループ

の礎を築いた人物であり、牧野正蔵と宮崎康二は1932（昭和7）年のロサンゼルスオリンピック（以下、ロス五輪）の競泳でメダルを獲得した人物である。この3名は、鷺津小学校の前身にあたる学校を卒業した人物たちである¹⁾。この校歌は1962



図1 五輪に挑んだ湖西の英雄（図1～3：筆者の母撮影）



図2 牧野正蔵



図3 宮崎康二

（昭和 37）年に当時の校長の山本祐一によって作詞されたものであり、富士山や浜名湖といった静岡県湖西市の地域性を表す言葉もある²⁾。牧野と宮崎は、母校の校歌の一節を表す人物であり、浜名湖を泳いで育ったオリンピックでもある。そして、現在の鷺津小学校からほど近い複合運動施設「アメニティプラザ」には、牧野と宮崎を讃えるモニュメントがある（図1-3）。

牧野と宮崎が泳いだ浜名湖では、この場所に所縁のある水泳のオリンピック日本代表が育っていった。日本が初めてオリンピックに参加したのは1912（明治 45）年のストックホルム大会であるが、1916（大正 5）年のベルリン大会の中止を挟んで、1920（大正 9）年のアントワープ大会に初めての競泳の代表選手として出場した内田正練は浜松出身であり、後に取り上げる浜松中学水泳部に所属して浜名湖で泳いでいた。1924（大正 13）年のパリ大会に水泳代表の主将として出場した小野田一雄、1928（昭和 3）年のアムステルダム大会に水泳代表の主将として出場した野田一雄も浜名湖で泳いでいた。1932（昭和 7）年の日本

水上競技連盟の機関誌『水泳』に寄せられた論考の一節では、「大正昭和を通じて濱名湖から巣立った麒麟児は枚舉に遑がない、国際オリンピック代表選手に選ばれた者だけでも内田正練小野田一雄竹林隆二、また最近では片山兼吉牧野正蔵宮崎康二の新鋭を送るに至った。顧みれば濱名の歴史は榮光に満ちてゐる」³⁾とされており、これが同時代的認識であった⁴⁾。

いっぽう、ストックホルム大会において日本代表選手は陸上競技の2名であったが、その後は選手団の人数や出場する種目数を微増させながら、メダルの獲得数も増やしていくことになる。1928（昭和 3）年のアムステルダム大会では、43名の選手を派遣し、陸上三段跳びの織田幹雄、陸上800mの人見絹枝と並んで、競泳の鶴田義行と高石勝男が表彰台に立った。そして、ロス五輪では、日本選手団の規模が一挙に拡大し、役員61名、選手131名の大選手団を送るようになった。ロス五輪において、特に水泳競技は、これに関わる日本の役員や選手から金メダルの獲得を期待されており、日本にとっても重要な意義をもつものと考

えられていた⁵⁾。この期待を日本競泳陣は背負い、ロス五輪で日本が獲得した18個のメダルのうち、12個までが水泳で獲得したものであった。そして、日本の男子競泳では、6種目中5種目で1位と2位を独占し、そのうち100m背泳ぎでは3名が表彰台に立ち、参加国に「水泳大国」を印象づけることになった。この大会で牧野と宮崎は、水泳競技の日本代表の選手として表彰台に立ったのである。そして、この時期になると「オリンピックは国民的関心事へと成長し、国民は「日本代表」に国家の威信と民族の誇りを投影させる」⁶⁾ようになっていた。戦前の日本におけるオリンピックへの熱狂は、1936（昭和11）年のIOCベルリン総会で1940（昭和15）年のオリンピックが東京で開催されることが決定したこと、および、その直後のベルリン大会で最高潮を迎えることになる。

1920～30年代におけるオリンピックの日本代表選手を取り上げるにあたり、佐々木浩雄と小石原美保の研究を検討しておきたい。小石原は、織田幹雄や南部忠平に着目して活字メディアに表れた彼らの語りを分析することで、そこに表れるスポーツ・ナショナリズムを論じている⁷⁾。佐々木は、1920年代後半から1930年代後半において「日本代表」意識がいかにして醸成されていったのかについて、代表選手やスポーツ関係者の語りや、メディアや企業を巻き込んだ挙国的な支援体制を取り上げながら、メディアや企業と政府、スポーツ界が相補的・互恵的関係を強固にするうちに人びとのナショナル・アイデンティティが強化されたことを論じている⁸⁾。両者は、個々の代表選手の語りを取り上げているが、とりわけ佐々木は、人見絹江や織田幹雄を取り上げながら、代表選手たちは国家的・国民的支援を受けるようになると国民的道德や国家的期待に応えるべく、個人の身体と国家の身体の狭間で揺れ動く様相を描いている。

ここで佐々木は注意深く「側面」という言葉を添えて、そうした日本代表選手たちが日本代表意

識のみをもっていたわけではないことを示唆しているが、日本代表選手は日常的に日本代表選手としてナショナルなるものを表す存在であるわけではない。選手たちはスポーツを始めたときから国家や国民の期待を背負ってスポーツをしているわけでもない。とりわけ、日本におけるスポーツ選手のライフコースは学校期毎と結びつく場合が多く、それに伴い練習場所や指導者が変わるし、出場する大会も学校代表という立場で身近な地域の大会からはじまることになる。選手はそうしたプロセスでの活躍を経て日本代表選手になるのである。それは日本代表選手になれば捨象されるものでもない。つまり、地域に住まうある選手が競技を始めて以降、学校代表選手と日本代表選手を経験するプロセスで積み重なっていく複層的な代表意識にも着目する必要があるのではないだろうか。

そこで本稿では、牧野正蔵と宮崎康二を取り上げ、日本代表選手をめぐる複層的な代表意識を論じることにしよう。具体的には、牧野と宮崎にとって関連深い浜名湾遊泳協会と競泳の日本代表派遣母体である日本水上競技連盟（以下、水連）の活動を中心にしながら、彼らが水泳を始めてからロス五輪で表彰台に立ち、ロスから帰郷するまでのプロセスを辿るものである。また、これを検討することを通して浮かび上がる、水連のロス五輪に向けた戦略についても論じることにする。

2. 浜名湖と牧野正蔵および宮崎康二

2-1. 浜名湾遊泳協会の設立と第1回浜名湾全国競泳大会の開催

静岡県 の西側に位置する浜名湖の周辺は、かつては水泳どころとして名を馳せていた。浜名湖は、その南部に位置する弁天島や、南部に面する遠州灘と結びつきながら連想されることもある。1900年を前後して、浜名湖を中心として水泳活動が活発化することになるが、この湖で水泳に取り組む集団には4つの流れがある。第1は浜松中学（現

浜松北高等学校），第2は遠州学友会，第3は浜松商業学校（現浜松商業高等学校），第4は掛川中学校（現掛川西高等学校）である。

1900（明治33）年8月，「濱松中學校の卒業生及在學生の有志約二十名のものが，濱名灣の西岸新所村の某寺（常德院－引用者註）を寄宿舍に當て，濱松高町の其基督教講義所の牧師其氏を師範として一夏水泳の練習を行つた」⁹⁾のである。この集団の活動が浜松中学の水泳部の活動として認可されたのは，1902（明治35）年のことである¹⁰⁾。1901（明治34）年には「遠州學友會が辨天島に水泳部を開設し，神傳流の辻氏（當時東京帝大農科學生）を聘して，正規の練習」をはじめることになる¹¹⁾。そして，浜松中学と遠州学友会の水泳部に「おくれること數年にして濱松商業學校（當時の校長は小原右馬允氏）が水泳部を開設し，神傳流の加藤彌兵衛氏を師範とし，その翌年には掛川中學校（當時の校長は小松倍一氏）が多大の犠牲を拂つて辨天島に水泳部を開設し，同じく神傳流の清水景愛，同督重の兩氏を迎へ」¹²⁾たのである。

このように1900年に入って以降には，浜名湖で水泳に取り組む4つの水泳部があった。「かやうに四つの水泳部が軒を並べて練習に勵んで居る…この頃の猛練習は第一にせり水と稱するもので，辨天島前のあの干潮時の急流に溯つてモリモリ泳がせるものであつた。…此時代はスピードのある泳ぎといふよりも水に強い事が必要であり，同時に各種の泳法に巧みであることが必要」¹³⁾であった。この時期は，各集団で師範を招いてそれぞれの泳法に取り組んでいたのである。

しかし，4つの水泳部が同じ場所で各々の泳法で水泳に取り組んでいるなかで，競争する機会が生まれていった。例えば，「濱名の辨天島も屈竟の水泳場であるが，35年夏遠州學友會水泳部と濱松一中水泳部の對抗競泳があつた，之れは選手双方6名宛で50碼の競泳を試みたもの」¹⁴⁾である。こうした集団間で競争する機会が生まれるなかで，1909（明治42）年に浜名湾連合水上大会が

開催されるに至った。この大会は4つの水泳部で開催されるものであり，遠州学友会が会場，浜松中学がプログラム編成印刷，浜松商業が会計，掛川中学が賞品を担当するかたちで実施された¹⁵⁾。そして，「聯合大會の一部として行はれた各部間の競泳が，若い人たちの敵氣心を惹起させる役割を演じ，次第に其の勝敗の跡を重大視する傾向を生じ，其結果は各部門の反目を促すやうになつて」¹⁶⁾いた。

このように各水泳部の間で，競争意識が生まれて敵対心も現れてきたことから，この状況を改善しようという動きが出てくることになる。そして，「心あるものは皆何とかして此状態から各水泳部を救ひ出さなければならぬと思つて居たが，容易にこれに手を出さうとする者はいない，また頗る困難な事業でもあつた。遂に内田千尋君によつて一石が投ぜられた」¹⁷⁾のである。ここでは，内田のほかに，堀江耕造，田畑政治らが中心となつて1916（大正5）年8月10日，4つの水泳部をまとめる濱名灣游泳協會が創立されたのである。

こうして4つの水泳部が1つの協会にまとまったことから，この組織を基盤とする活動が始まり，対外的な水泳競技への関心を強めていくことになる。濱名灣游泳協會という共同体としての実力を試すために，離れた場所で開催される競技会に参加するようになった。そして，1918（大正7）年7月30日，濱名灣游泳協會は「戸田灣に於ける東京帝大主催の水上大會と清水灣に於ける静岡民友新聞社主催の競泳大會に選手を派遣」¹⁸⁾したのである。

こうした大会に濱名灣游泳協會として出場するなかで「大正九年にも戸田に遠征を試み」たもののクロールという「競泳法を以て彗星の如くに出現した茨木中學のために思はぬ不覺を取つた」¹⁹⁾のである。こうして他の泳法にふれるなかで，濱名灣游泳協會としての実力を省察しつつも，それは濱名灣游泳協會に独自の道を歩ませる力に転化されていった。つまり，濱名灣游泳協會の手により，濱名灣で全国的な水泳大会を開催することに

向かうことになる。

こうした他の水泳競技会での競技成績、より直接的には戸田での大会の結果を受け、浜名湾游泳協会は浜名湾全国大会の開催に向けて動き出すことになる²⁰⁾。そのためには大会の会場となるプールが必要となるのだが、資産家の長谷川鉄雄の多大な支援と東京日日新聞や地元の人士の後援を受けて「北弁天島の同氏別邸東に長さ百米幅三十米のプールを建設」された²¹⁾。そして、1921（大正10）年8月29日、この場所で第1回浜名湾全国競泳大会が開催されるに至ったのである。

2-2. 牧野正蔵と宮崎康二一小学校期と中学校期を中心にー

牧野は1915（大正4）年、宮崎は1916（大正5）年に生まれ、共に浜名郡吉津村立吉津尋常小学校に通った。浜名郡吉津村立吉津尋常小学校は、その系譜を確認すると、1873（明治6）年に開校された小学鷺津学校と小学川尻学校がはじまりとされている。この2つの学校は、学区内で名称や位置づけが変わるなか、両校の流れをくむ形で1922（大正11）年4月1日に吉津尋常小学校となった。そして、1929（昭和4）年4月1日に吉津村は鷺津町となり、これに伴って吉津尋常小学校も鷺津尋常高等小学校に改称した²²⁾。

吉津尋常小学校では、体育の振興に力を注ぐ社本唯三が校長を務めていた。社本は、テニス選手を育成する一方、水泳選手の育成にも力を注ぎ、牧野や宮崎をはじめとして有力な選手が育っていった²³⁾。社本は、体育の先生を牧野と宮崎につけ、彼らは学校の水泳の時間とは別に練習する日々であった²⁴⁾。牧野と宮崎は、同じ学校で同じ指導者に出会い、同じ練習をする日々を過ごしたのである。

いっぽうで牧野と宮崎は、常に指導者のもとで練習していたわけではなく、彼ら自身も積極的に泳ぐことに親しんでいたようである。宮崎自身は次のように回顧している。

「牧野君も私も、その頃から湖岸での水遊びが大好きで、学校が終わると家に帰るのではなく、湖岸の水泳場に向かうのが常でした。」²⁵⁾

「水遊びの時は、“正蔵君”“正蔵君”と一年上の彼を、まるで兄のように慕い、また時にはライバルのように競い合いました。」²⁶⁾

牧野と宮崎は、鷺津小学校から徒歩圏内にある浜名湖に出向き、二人揃って泳いでいたようである。同じ小学校生活を送り1歳しか年が違わない二人の仲の良さがうかがえる。少なくとも身近に泳ぐ場所として浜名湖があったことは、二人が泳ぐことにのめり込んでいく環境的な条件の1つとみなすことができるかもしれない。こうして、牧野と宮崎は、学校での練習と好んで向かった浜名湖で泳ぎに親しんだのである。

やがて牧野と宮崎は記録そのものが向上し、浜名湖周辺の小学校の水泳大会に出場すると、競技会では敵なしと謳われるようになり、1927（昭和2）年に大阪で開催された全国児童水泳大会に出場した際には、牧野は200mと400mの自由形で優勝し、宮崎は50mと100mの自由形で優勝した²⁷⁾。この結果を受けて、社本校長は満面の笑みで牧野と宮崎を迎えたようである²⁸⁾。競技大会に出場するころになると、牧野は長距離、宮崎は短距離に分かれていたようである。

宮崎より1学年上の牧野は、吉津尋常小学校を卒業すると1928（昭和3）年4月より見付中学校（現磐田南高等学校）の尾崎楠馬校長の熱心な誘いもあって見付中学校に進学した。ここで何名かの部員と水泳部の部長を務める小林寛の家に下宿しながら水泳に取り組み、競技成績を高めていくことになる²⁹⁾。

いっぽうの宮崎は、鷺津小学校を卒業するとすでに水泳部が創設されてから10年以上経過し、また、1920年のアントワープオリンピックに出場した内田正練も在学した浜松一中に1929年4月から進学した。ここで宮崎は、上級生に求められる形で水泳部に入部したようである³⁰⁾。

牧野と宮崎は、別々の学校に進学したのだが、牧野は長距離、宮崎は短距離の選手だったので、全国中学水泳大会や学校対抗で顔を会わせることはあっても、二人が同じ種目で競うことはほとんどなかった。二人が再び同じ場所で練習するのは、後述するロス五輪に向けた代表合宿や遠征などであり、このときそうした未来は思い描かれるものではなかっただろう。

先に名前が知れ渡り日本代表の有力選手とみなされるようになったのは、年長の牧野であった。牧野は、1929（昭和4）年8月15、16日に弁天島で開催された浜名湾全国大会に出場した。この大会で牧野は、1500m自由形を20分44秒2、800m自由形を10分42秒0で泳ぎ、共に日本新記録であったが、とりわけ1500mは世界新記録であった³¹⁾。『水連四十年史』では「牧野はまだ14才の2年生にすぎなかった。小柄ながら荒っぽいピッチ泳法でよく続き、驚異の少年として注目のまともになった。」³²⁾と記されている。偶然の要素があるが、牧野は数ある大会のなかで小学生時代に泳いだ浜名湖で日本新記録を出し、近郊だけでなく水泳界からも注目されるようになったのである。それは、牧野が浜名湖で泳いで育ったことを背景として、浜名湖の水泳どころとしての名を高める効果もあったはずである。

この時期、浜名湖はオリンピックの競泳選手の何名かと所縁があることから水泳が盛んな場所として知られていた。後年、牧野と宮崎よりも2、3歳年長で静岡県鷺津町に隣接する愛知県豊橋市出身の清川正二は「静岡県浜名湖の弁天島プールで行われていた浜名湾遊泳協会主催の『全国競泳大会』といえ、当時、『日本水泳界のメッカ』といわれて、天下の強豪選手が集まる大会であり、この大会を土台に数多くの世界的逸材が生まれた伝統ある大会であった。」³³⁾と回顧している。浜名湖が水泳どころであるというイメージがあり、それに対して牧野と宮崎の活躍が一役買っているのではないだろうか。

水連の機関誌『水泳』でも、濱名湾游泳協會で

中心的な役割を担う堀江耕造が「濱名灣を中心として」と題して、浜名湖を中心とする競泳の現状を紹介している。そこでは、「わが地方に於いて相變らず頭角をあらはして居るのは中等學校である」として牧野や宮崎などの中学選手を紹介している。そして、「濱名灣游泳會を背景として各種の國際競技會に出場した選手名を言上する機會を得た事は無上の光榮であり多年これらの事に深い關係と興味とを有する私として實に嬉しい事であった。」と述べている³⁴⁾。堀江からすれば、郷里意識に基づいて浜名湖周辺の水泳事情を水連に紹介したのである。

1931（昭和6）年6月20、21日に浜松高工主催、東京朝日新聞社後援の東海中等学校競泳大会では、すでに注目の的であった牧野と宮崎が「元氣一杯の活躍を見せ、質量共に豊かに盛會」³⁵⁾であった。宮崎は100m自由形と200m自由形で、牧野は400m自由形と800m自由形で、それぞれは優勝したのである。この結果は、宮崎が在学する浜松一中、牧野が在学する見付中学の名声を高めると同時に、浜名湖が水泳どころであることを印象づけるものである。

3. 日本代表への選出ー日本水上競技連盟の活動を中心にー

3-1. 日本水上競技連盟の戦略ーロサンゼルスオリンピックに向けてー

1920年代に日本の水泳競技の組織や制度は、地域的にも国家的にも整えられていくことになる。水連は、1924（大正13）年10月31日に結成された。この連盟は末広巖太郎を仮主事とし、また、12の地域に協会を設置した。地域ごとの協会は北海道、東北、北陸、関東、東海、近畿、中国、四国、九州、台湾、朝鮮、満洲から構成するものであった³⁶⁾。これは、水連が水泳の全国統括組織としての体裁を整えていくための下地になった。

1926（大正15）年8月、水連は「明治神宮競

技大会に関する声明書」ならびに「極東大会に関する声明書」と題する2つの「声明書」を発表した³⁷⁾。前者については、室内温水プールの設置の見通しが立たないことと神宮大会への学生参加が制限されたことを受けて、この大会へ参加しないことを表明するものであった。後者については、極東大会ではなく、世界的な舞台であるオリンピック大会に向けた準備を重視することを表明するものであった。特に「極東大会に関する声明書」については、水連が競技力の向上を重視して活動していくことを方向づけるものであった。

競技力に重点を置くようになった水連は、競技規定や規約を整備・改正していくことになる。1927（昭和2）年5月15日に、水連は評議員会を開いて組織の変更と、競技規定の制定を行った。規約改正では、連盟の組織構成を従来の13に分けた地域単位³⁸⁾から、加盟を希望する競技団体が水連に加盟申請を行い、理事会に加盟を認めるかどうかを審査する権限を与えることになった。最初は7つの団体が加盟し、浜名湾遊泳協会も水連に加盟した³⁹⁾。競技規定については、飛込や水球を含めて、国際水泳連盟の条文に則って規定を整備し、日本国内で世界新記録が生まれた時、国際水泳連盟によって記録が認定されるルールを整備・確立させた⁴⁰⁾。

さらに1928（昭和3）年のアムステルダムオリンピックのとき、国際水泳連盟に加入し、1929（昭和4）年には従来まで大日本体育協会が有していた国際水泳連盟における代表権を譲渡された。また、学生水泳競技連盟が水連へ加入し、水連は神宮体育会へ加盟し、明治神宮にプールが完成した⁴¹⁾。このようにして、水連は、競技力の向上を視野に入れながら、日本の水泳競技を統括する団体へと体裁を整えていったのである。さらには、日本記録の認定や世界記録の申請のために、1930年より水連はプールの公認に関する規定の整備と公認化の作業も進め、1933（昭和8）年には30プール、1935（昭和10）年には45プールを公認プールとした⁴²⁾。

このように、水連は競技力の向上に向かい、日本の水泳競技の統括団体になるとともに、1930（昭和5）年には機関誌『水泳』を創刊することになった。そして、水連の活動を牽引する田畑政治を筆頭に「水上聯盟が向ふ二年間オリンピック第一主義の方針」を明確にスローガン化し、1932（昭和7）年に開催される第10回オリンピックロサンゼルス大会に向け、アメリカチームに勝利することを目指した具体的な戦略を構想していくことになる。

田畑によれば、第一の戦略は、「全日本選手権大会の種目をオリンピック種目中心主義」として「この種目に優秀な選手を作り出さうとする」ことである。第二の戦略は、「正式のコーチ、マネージャーを選定し代表選手候補者を合宿させ十日前後の合宿練習しこれ等の選手を以て日米對抗を行ふこと」である。第三の戦略は、ロサンゼルス大会の日程を見据えて、「十二月から正月の休みにかけて更に、選手候補者を東京に集め、正式のコーチを附して二週間前後の合宿、第四弾として四月の休暇に矢張り二週間前後の合宿練習、最後に六月の終りから七月にかけ三週間の合宿練習を行ふこと」である^{43) 44)}。

このような、オリンピックをはじめとする国際的な競技大会を中心として事前の準備に力を入れる水連の取り組みについては「ひとり水上競技だけでなく、その他の競技においてもはやく方針を確定しその準備に着手しなければなるまい」⁴⁵⁾と考えられるようになった。水連の国際的な競技力を重視する戦略的な活動は、他の競技種目に対しても多かれ少なかれ求められるようになったのである。

そして、水連は1930（昭和5）年10月10日に理事会を開き、日米對抗水上競技会開催の件について協議し「明年五月末日までには明治神宮プールに貴賓席を含むコンクリートスタンド（収容総数一萬四千五百名）とプールの照明、事務室、選手室なども完成するので、その完成記念として日米水上大会を開催」⁴⁶⁾を計画することになった。

そして、1930年12月26日に「米國體育協會よりの正式回答」が届いた。1月28日に水連は定例連盟協議会において日米対抗水上競技會開催の日程や種目等について決定した⁴⁷⁾。

3-2. 代表合宿と運動部活動

水連は、日米対抗とロス五輪に向かうなかで、有力な選手を探し出して日本代表選手を選出することになる。各競技大会で顕著な記録を残す牧野と宮崎が注目的であることは衆目の一致するところであった。たとえば、田畑は1930（昭和5）年の時点で「牧野、田中等の中等學校選手も次のオリンピックの有力な候補者である」⁴⁸⁾し、「濱松一中の宮崎の奮闘も非常に心強さを與へてくれた」⁴⁹⁾と述べている。とりわけ、田畑は浜松中学の出身で宮崎と同窓でもある。牧野と宮崎は、すでに、ロス五輪の代表候補選手とみなされていたのであり、このことは水連の中でも共有されていたのではないだろうか。

1931（昭和6）年1月28日に開催された水連の定例連盟協議会では、「春季合宿練習に就き談合したれ共細目の決定を見ず三月末昨年度ベストテンを標準として選手の東上を求め東京に於て練習會を催すことに大體の方針を定む」⁵⁰⁾ことになった。すでに田畑によって代表合宿の案が示されていたが、それぞれの地域で練習している有力選手を東京に集めて、日本代表合宿と云う練習會が開かれることが現実的なものになった。これは、水連が日本の水泳界の中心に位置しているという性格を強めるものであった。そして、水連が本部を置き、選手が集まる東京には日本代表の集合地点としての意味が付与されていくことになる。さらに、この合宿で代表コーチを務める松澤一鶴には、日本の競泳のスタンダードを生み出しうる地位が付与されたことを意味している。

そして、競泳の日本代表合宿が実施されていくことになる⁵¹⁾。1931（昭和6）年7月28・29日の日米対抗水上競技大会の予選会を経て日米対抗水上競技大会の直前に合宿練習が開催されたが、

監督の松澤一鶴は、部屋割りについて「同様の種目の人たちは同様の行動をとらねばならぬ」ため、「大體種目別として分けた」のであり、「煙草のむ人にプールの往復、練習中に於ては一切禁煙を申し渡した」のである^{52) 53)}。共同生活を送るためのルールを定めようと、日課案はおおよそ以下の通りであった⁵⁴⁾。

「午前 8. 30 起床（どうしても夜の練習があるので此れは遅れがちであつた）

〳 9. 30 朝食

〳 11. 45 - 1. 00 晝の練習

午後 1. 30 晝食

休憩 午睡（午睡を防ぐ悪戯は禁制）

〳 6. 00 夕食

〳 7. 00 - 8. 30 夜の練習

〳 9. 00 入浴 小夜食

〳 10. 30 就寝」

この日課案は、アメリカチームと場所を共有しなければならなかったという事情が含まれているので、それがなければ案は異なっただろうが、この代表合宿では1日のスケジュールがある程度定められていたのである。このように、代表合宿は、一定のルールに沿い、代表コーチの指示のもと、同じ場所で生活し、同じ練習をし、同じものを食べ、同じ場所で寝ることである。

この合宿で松澤は「各型種ごとに共通の大きな缺點が発見された」ので、「フォームの改良を計らう」ことにした⁵⁵⁾。日本の競泳のスタンダードを発信できる地位にいる松澤は、その立場から各々の選手の泳ぎ方に指示を出していくのである。それは、それぞれの地域性をもつ泳ぎ方が均質化されることでもある。松澤は、クロールという泳ぎ方を一つとってみても、それを表す言葉が統一されているわけではないことや、技術を言い表すこと自体の難しさから、「地方により人によ

り、どういふ風に理解して貰へるか」⁵⁶⁾ が問題にもなったという。

代表合宿について宮崎は「強い人達に交つて練習が出来るから何とかやれやしないかといふ氣持はありました」⁵⁷⁾ と言い、牧野は「代表選手に推薦されてからの合宿練習には身が入つて日々好調に立かへりつゝあるのを知つて日米對抗には確信を以て臨む事が出来ました」⁵⁸⁾ と述べている。選手にとってみれば、代表合宿に参加することで、自分の力量を測ることができるし、大会への準備として重要なものである。

その一方で、代表合宿に参加する選手は、普段は学校や身近なプールなどで練習している。それゆえ、水連の関係者が、選手の日々の様子を把握できているわけではないのである。田畑は、牧野について「見付中學校には高石や入江に杉本先生があるやうに小林先生といふ日常の監督者がついてゐる」⁵⁹⁾ ので大きな心配はしていないようである。日本代表選手を求める田畑にとってみれば、それぞれの競技団体や学校にいる指導者が、日々の日本代表選手の練習をみているのである。したがって、水連は、代表候補選手の状態をチェックする必要があるために、競技団体や学校の水泳指導者との関係を密接にする必要が出てくるのである。田畑は、「小林先生に注意を御願ひしたい。僕たちがオリンピック第一主義だとか何とかいふのも牧野の存在を前提としての話、牧野が駄目になつてはもともと子もなくなつてしまう」⁶⁰⁾ というのである。田畑の期待は、学校や競技団体で日常的に日本代表選手の練習に関わる人たちにもかけられているのである。

このとき、地域の競技団体の関係者は、自らの競技団体から選手が日本代表に選出されることに喜びを感じている。濱名湾游泳協會の堀江耕造は、「濱名湾游泳會を背景として各種の國際競技会に出場した選手名を言上する機會を得た事は無上の光榮であり多年これらの事に深い關係とを有する私として實に嬉しい事であつた」⁶¹⁾ と述べている。堀江は、浜名湾という郷里意識に立脚して牧野や

宮崎が日本代表に選出されることに喜びの感情を抱いているのである。水連と地域の水泳団体が、オリンピックでの日本の活躍という目的のもとに結びついていくのである。

そして水連は、1931（昭和6）年8月7～9日、アメリカチームを迎えて日米対抗水上競技大会を開催した。12種目が行われ、得点は40対23で日本チームが勝利した。水連にとって「日米対抗競技大會は、それ自身世界の二大水泳王國の對抗と云ふ意味で興味あるばかりでなく、更に明年ロス・アンゼルスに於て開かれる第十回國際オリンピック大會の前哨戦として全世界の視聽を集めたもの」⁶²⁾ である。松澤は「結果に陶醉して居られぬ程オリンピックが近づいてゐる」⁶³⁾ と述べている。

また、水連は、同じ年の1931（昭和6）年10月2日～5日に開催された明治神宮体育大会を全日本選手権大会とオリンピック第一次予選を兼ねるものと位置づけた。そのため、これまでの神宮大会が「奉納氣分が多かつた」ものとは変わり、「非常に緊張感を持つてゐた」のである⁶⁴⁾。競技性が醸す雰囲気は、大会そのものが宿していた雰囲気をも飲み込んでいくようである。この神宮大会において、宮崎と牧野はともに浜名湾游泳協會の所屬という立場で出場した。宮崎は100mで1位、200mで2位、牧野は400mで3位、1500mで2位であつた。また、宮崎と牧野は800mリレーで共に泳ぎ、宮崎は第一泳者、牧野は第四泳者として出場して9分20秒8のタイムで日本新記録を更新した⁶⁵⁾。この大会の終了後に神宮水泳場貴賓室でオリンピック候補選手が選定された⁶⁶⁾。

ク 10. 00 消燈」

4. ロサンゼルスオリンピッククーメダル獲得と鷺津町の反響

4-1. 代表合宿とロサンゼルス到着

日本代表候補に選抜された競技者 32 名は、コーチとマネージャーとともに東京 YMCA の屋内プールで、12 月 25 日から翌年の 1 月 10 日まで松澤のもとで合宿練習を行った。この代表合宿では、「選手候補者もきまつたので、遠征すべき人たちは殆ど此の内から選ばれる故になるべく早くから一緒になる事、統制ある合宿に慣れる事、合宿もなるべく洋風の生活に親む事、食事の節制嗜好の調査等の合宿とかチーム統制とかに關係ある方面の練習も考へられた。其の他餘暇を利用して、英語の會話や、外國事情の聴取、又體格検査に依つて選手のコンディションを調べたり、海外渡航へ對する遺憾のない様な準備や、種々様々の目的を以て此の合宿計畫はなされた」⁶⁷⁾ のである。この合宿では、ロス五輪に向けて日本を出発してからアメリカに辿り着くまでの船上で行う体操や、アメリカで過ごすことを見据えた英會話などが組み込まれていた。また、「冬季において練習の途を失つて終ふ日本の水泳界、殊に地方の選手たちに練習の便宜を與へよう」⁶⁸⁾ という意図も込められていた。そして、日課は基本的に以下の通りであった⁶⁹⁾。

「午前	7. 00—7. 30	起床
ク	8. 00	朝食
ク	10. 00 - 11. 00	選手會、講演、會話練習等
ク	11. 30	晝食
午後	0. 30 或は 1. 00	練習開始、丁抹體操
ク	1. 00 或は 2. 00	水泳練習開始
(此開始時間は YMCA 體育部の一般会場の都合に依り變更した)		
ク	5. 30	夕食
ク	9. 00迄	当別の時の外自由

この合宿に引き続いて、3 回目の合宿も同じ場所です 3 月 20 日から 4 月にかけて 3 週間実施された。牧野は「人間として努力すればどれ丈けのよい記録を建てる事が出来るかといふことを目當てにして行くつもり」⁷⁰⁾ と言い、宮崎は「合宿練習で松澤監督や野田助監督の懇ろな指導をうけて來てゐますから今後は自分の缺點を補つて行く事に努力し、猛練習」⁷¹⁾ を積んでいくと述べた。また、この合宿期間中の 4 月 7 日には、「オリンピック水泳選手候補者を激勵するため」に「スポーツ文相」といわれる鳩山文相が訪れ、『日章旗を掲げずは止まざるの熱烈なる意氣と、公正なる精神の面々相俟つてこそ始めてスポーツに於て眞に強くなり得る』旨を述べ⁷²⁾ ていた。

そして、6 月 4～5 日の第 2 次予選と 11～12 日の最終予選が実施され、総勢 22 名の代表選手が決定された。ここには、牧野と宮崎が選出されており「鷺津の名前が一躍知られる」⁷³⁾ ことになった。そして、ロス五輪が控えるころ、松澤は「選手達は豫選會迄に更にオリンピック迄に總ての練習を終つて、四年間の成果と確信を以て世界に問ふ事が出来るであらう。」⁷⁴⁾ と述べている。

日本代表の選手団の先発組は、1932（昭和 7）年 6 月 23 日に、後発組は 6 月 30 日にロサンゼルスに向けて出発することになる。23 日の午前 9 時半、先発組に含まれる男子競泳選手は明治神宮に到着した。選手たちは「紅白ダンダラ細筋でふちとつた恩賜のプレザー・コート、白パンツ白靴、麦わら帽といふスマートな出立ち、清拔を受けて内殿に入り、玉串を捧げた。之れから水泳王國を築き上げた懷しの外苑プールに到り末弘會長を中心に記念撮影」⁷⁵⁾ をした。そして、11 時ごろには丸ビル前に到着した。ここには「無数のファンが國民的感激をその面にたゞよわして待つてゐる。やがて選手一同は日の丸の小旗を手に手に打ち振り、宮城前に更新、兩陛下萬歳！！ 必勝を誓ひ、君が代の斉唱」⁷⁶⁾ をした。そして、東京駅を出発

するときには「嵐のやうな感激の渦『ばんざい！』『ばんざい』『しつかりやつてくれ』の歡呼」⁷⁷⁾が響いた。横浜港を出発する時にも、「狂操曲は郵船龍田丸の朗かなバンドと合して青空高く鳴りひびく」⁷⁸⁾のである。同じ服装で明治神宮を参拝し、集まった人たちとの「万歳」や「君が代」を通して、代表選手たちは横浜港を出発するときには、日本代表としての意識を強めたに違いない。

横浜港を出港してから船の上ではデンマーク体操、途中で立ち寄ったハワイではプールに入って練習して調整しつつ、先発組は7月9日に、後発組は7月15日にロサンゼルスに到着した⁷⁹⁾。日本を出発してからロス五輪が始まるまでの間、松澤は「私達が苦心してゐるのは、どうかして選手のコンディションを大會當時に最上の状態にしたいといふ」ことと述べている⁸⁰⁾。これまでの大会では、ヨーロッパの都市が開催地であったためシベリア鉄道に揺られて移動していたのである。そのため移動中はほとんど身体を動かすことができなかったが、ロス五輪は船中で多少なりとも身体を動かすことができたのである。ロサンゼルスに到着すると「市の一角を占領する日本人町はまるで日章旗の波、渦！ しかもその旗を背景にして、朝から晩まで應援歌のレコードが鳴り響いた」という⁸¹⁾。遠征先で歓迎を受ける形で日本代表としての意識を感覚する場面があったのである。

4-2. メダル獲得と鷺津町の反響

ロス五輪の期間は1932（昭和7）年7月30日から8月14日であった。14名の選手が静岡県出身であり「縣民の期待はすばらしいもの」があるが、同時に牧野と宮崎の「兩君を生んだ濱名郡鷺津町の人気は大變なものである、毎日ロサンゼルスにおける兩君の便りの出てゐる新聞は至るところ引つ張りだこで兩選手とも非常に良好なコンディションであると傳へられてゐるので全町舉げての喜びと期待は全くすばらしい」⁸²⁾という。

水上競技の期間は8月6日から13日であった。水泳競技は「毎日早いときは午前八時から、遅く

とも午前十時頃から開始されて、正午頃一旦閉場し、再び午後三時から午後の競技を行ひ、競泳に引續いて最後には大概水球で終るのが通常のプログラム」⁸³⁾であった。そして、牧野と宮崎が育った鷺津町では、「青年團員をはじめ一般町民まで毎夜の如くお宮参りして宮崎、牧野兩選手の必勝祈願を籠めてゐる」し、「二三日前に同町の實家に入つた宮崎君からの便りによればコンディションは極めて良いとの事に兩親も大喜び」⁸⁴⁾であった。

最初の競泳の競技種目は、宮崎が出場する100m自由形であった。現地時間でスタート時刻は、予選が8月6日午前9時、準決勝が同日午後3時30分、決勝が翌7日午後3時20分であった⁸⁵⁾。予選から決勝までの報は、逐一、鷺津町にも届けられた。鷺津町に第一次予選を宮崎が「パスした報が傳はるや同君を生んだ濱名郡鷺津町の熱狂ぶりは全く同町はじまつて以來のことだつた『康二さんが一等だ』といふ聲はせまい町の隅々にまで及」⁸⁶⁾んだようである。

予選と準決勝を通過した宮崎は、「日米爭覇の鍵である本大會劈頭」⁸⁷⁾の男子100m自由形で58秒2というタイムを記録し、金メダルを獲得した。これについて、宮崎の家族とその近隣住民たちは一様に喜びの声をあげたようである。「鷺津町は朝來全くの熱狂ぶりで小林町長は有頂天の姿で早速ロスアンゼルスへ祝電」⁸⁸⁾を打った。このとき、宮崎家に「押しかけた親戚や町内の人々で大きな二階建の邸宅はごつた返す騒ぎ、頻々と祝電が舞込」⁸⁹⁾んだようである。宮崎の父親の初五郎は「『私の氣持は何とも表現出來ません、神様のお陰です、全國民の御後援の賜物です』」⁹⁰⁾とコメントした。宮崎のメダル獲得の報は、宮崎の家族のみならず、宮崎家に多くの人が集い、鷺津町にも熱狂をもたらしたようである。

さらに、宮崎家には「牧野選手の父親秀藏さんが『お目出たうございます』とにこ／＼やつてくる」⁹¹⁾のである。牧野の父親もコメントを求められ「『宮崎さんが勝つたんで正藏もいゝ氣持とな

り頑張るでせう』⁹²⁾と述べた。宮崎と牧野の郷里である鷺津町では、父親同士が喜びを分かち合っている。

宮崎が優勝した報を受け、鷺津町後援会では「同町小学校庭に生徒全員及び町民多数が午後1時集合し同3時校庭を出発し、全町を旗行列し宮崎家の前に至り万歳を三唱、それより同町氏神に赴き同様万歳を唱えたが同夜は宮崎製糸工場男女全部と町民が混じって盛大に提灯行列を行う事」となった⁹³⁾。鷺津小学校と宮崎家を中心として鷺津町を挙げたイベントが行われたのである。

そして、宮崎と同じく牧野も「好成績を残すものと豫想し関係者を以て盛大なる祝賀會を開くべく計畫を樹て」⁹⁴⁾始めたのである。牧野にも大きな期待が寄せられることになった。牧野選手の父親の秀蔵は「『宮崎さんとの息子が勝つたのだから正蔵もどうしても勝たせなければ…』といふのでそれこそ全く仕事も何も手につかず毎日神佛に祈願を籠めての熱心ぶり」で「康二さんが優勝したことを聞いたとき自分は始めてせがれの重い使命を思ひました」⁹⁵⁾という。牧野の父親も日本代表の重圧を感じている。

100m 自由形の次は 400m 自由形と 1500m 自由形と続き、牧野は、1500m 自由形に出場した。現地時間でスタート時刻は、予選が 8 月 11 日午前 10 時 40 分、準決勝が翌 12 日午後 3 時 20 分、決勝が翌 13 日午後 3 時 15 分であった⁹⁶⁾。鷺津町では、牧野の 1500m 予選の結果を待ちわびて、「この朝近所の人達まで集まつてけふの成績を心配して集まつて」⁹⁷⁾いた。そして、14 日の夜は「盛大なる提灯行列を行ふべく目下準備を急いでゐる」⁹⁸⁾のである。鷺津町では、競技成績が分かる前から祝賀の準備を進めている。そして、牧野は「日本で最も有望なものとして非常に期待された」⁹⁹⁾男子 1500m 自由形で 19 分 14 秒 1 を記録し、北村久壽雄に続く 2 位であった。牧野は「これも郷土の皆様の御後援の賜物と感謝してをります」¹⁰⁰⁾と述べた。

これについても、牧野の家族とその近隣住民た

ちは一様に喜びの声をあげたようである。「牧野君の生家は町の青年団員の手によつて萬國旗がさながらオリンピックの競技場の如くへんぽんとひるがへつてゐる。町當局では牧野君の快報を知るや早速花火數發を打上げて祝意を表したがさきに宮崎君が優勝した時と同じ様に午後三時小學校を起點として全町民舉つて旗行列をなし町内を練歩いたが更に夜は午後八時からこれも全町民を以て盛大なる提灯行列を行ひ全町火の海と化した」¹⁰¹⁾のである。鷺津町では、宮崎が優勝した時と同様の熱狂に包まれた。そして、牧野の父親の秀三は「惜しくも二着となつたが世界的大記録をだしたので意を安んじて居ます、昨夜はどうなることかと心配して一夜まんじりともせず今朝などは水とりをとつた位です」¹⁰²⁾とコメントした。牧野の父親もまた、日本代表を背負っていたのである。

牧野と宮崎の活躍を受け、鷺津町では、「歡喜は全く絶頂に達し早くも兩選手に對する歡迎祝賀會の準備を急いでゐる兩選手歸町の際はまづ驛前に大アーチを設け町内各戸に國旗を掲げて歡迎し町當局からは記念品を贈呈し夜は提灯行列を行つてその勞を慰めるべく種々計畫」¹⁰³⁾され始めた。また、「本興寺前の濱名湖プールを改造して記念プールを造り小學校では校庭に優勝記念の月桂樹を植へるねど着々準備」¹⁰⁴⁾が進められている。

牧野と宮崎の郷里である鷺津町では、家族はもちろんのこと、町人の多くがオリンピックに熱狂したのである。それは、鷺津町民にとって集合的記憶というべきものであったにちがいない。鷺津町の人びとにとって、牧野と宮崎は、日本代表であるだけでなく、鷺津町代表でもあった。牧野と宮崎のオリンピックでの活躍を通してローカルな場がナショナルな場に接続されたのである。

5. おわりに

5-1. 日本水上競技連盟のロサンゼルス大会に関する戦略についての考察

本稿は、牧野と宮崎がロス五輪で表彰台に立つ

までのプロセスを辿るとともに、浜名湾遊泳協会と日本水上競技連盟の活動を取り上げた。ここでは、水連のロス五輪に向けた戦略について3つの点を指摘しておこう。

第一は、水連に加盟する競技団体が開催する大会で実施される種目がオリンピックで実施される種目に変更されていくことである。全日本選手権大会の種目をオリンピックの種目に合わせる水連がオリンピック派遣母体であることから、水連に加盟する水泳団体が開催する大会の実施種目も、水連の方針に合わせる形でオリンピックの種目に揃えることになる。こうして、オリンピックで採用される種目が地域で開催される大会の種目にも日本の統括的な地位にいる競技団体を介して影響を及ぼすことになる。オリンピックの種目と地域の大会の種目が明確に同じものとなると、選手も地域の大会とオリンピックを連続的なものとみなして、それらの日程を見定めながら練習や大会に臨むことになる。さらに、どの大会の記録であれ個々の選手の記録の比較が可能になる。

第二は、水連が水泳の代表選手を派遣する機関であるだけでなく、代表選手を養成する機関としての機能をも備えたことである。それまで、選手はそれぞれの地域や学校でのみ練習していたのだが、水連の試みは大会に備えて代表候補を集めた合宿を代表コーチのもとで実施することである。また、この時期の代表コーチは、日本の水泳のスタンダードを発信しうる地位にいる。いわゆる「代表合宿」というこの合宿は、選手にとって地域の代表であるだけでなく、日本の代表という意識が醸成される時間と空間としての意味を持つ。この時は、まずロス五輪に向けた形で代表合宿が行われることになるのだが、その後のベルリン五輪に向けて継続的に実施されることになる。

第三は、水連と諸地域の水泳連盟の関係が明確化したことである。水連の側からいえば、諸地域の水泳連盟との関連で「地方」の水連として意識させ、自己規定を要求し、そのことを通じて水連の日本代表選手を選出する機関としての地位を確

かなものとした。諸地域の水泳連盟は各々を諸地域の水泳連盟と認識するが、水連は諸地域の水泳連盟とは異なり、それを越えた特権的な位置にある。同時に様々な「地域」に出自をもつ選手を預かる水連は、「地方」の水泳連盟の出身者の集合体でもある。

5-2. ロサンゼルスからの凱旋—鷺津町の歓迎—

さて、日本代表の選手団はロス五輪を終えて続々と帰国することになるのだが、日本代表選手が活躍したことは、日本という枠組みからみても、大きな反響をもたらすものであった。牧野と宮崎が、ロス五輪で表彰台に立ったことは、ナショナルな文脈においては、「男子競泳において劈頭に先づ宮崎君優勝し相次いで八百衄リレーに優勝して、…國民の熱狂はその極度に達し」¹⁰⁵⁾ していたのである。

日本を熱狂させた日本代表の第一陣は9月3日、第二陣は9月8日に帰国した。競泳組は第二陣に含まれており、9月8日に帰国した。選手団を歓迎する会をまず開いたのは東京市であった。選手たちは横浜港に到着すると、東京に向かった。そして、東京市長をはじめ、多くの関係者が列席するなか、日比谷公会堂での歓迎式典、神宮プールでの歓迎報告会が開催されたのである。これらの催しを終えると、選手たちはそれぞれの生活する場所に戻っていくことになる。帰る先々でもまた歓迎を受けることになり、牧野と宮崎にとって、それは見付中、浜松一中、浜名湾遊泳協会そして鷺津町の地においてであった。牧野と宮崎を迎える人びとは、国旗、町旗、オリンピック旗を振り、万歳を叫んだ。行く先々では、日ごろから接する学校、後援会、浜名湾遊泳協会の関係者の顔も並んでいる¹⁰⁶⁾。鷺津町で牧野と宮崎を横浜港で歓迎するとして人を募ったところ、60名あまりの応募があり、鷺津町人が横浜に向かってもいた¹⁰⁷⁾。

牧野はロス五輪の本番で「ふんどしは見付中學水泳部員サイン入のふんどしを緊めてゐるので余

計に緊張した譯です」¹⁰⁸⁾と述べているように、牧野は郷里への思いを身につけて泳いだのである。宮崎は浜松一中に在学していることから鷺津の手前の浜松駅で歓迎を受けた折「宮崎康二はただ今帰りました。限りなき郷土皆様の御熱情によりまして豫期以上の成績を収め得ましたことは全く御禮の言葉も知りません」¹⁰⁹⁾と、郷里へ思いを寄せている。選手たちもまた、日本代表意識のみならず、郷里意識を持っている。こうして日本代表選手は、歓迎を受ける先々で、郷里への意識を再確認し、出身地域への意識を顕在化させる。

そして、牧野と宮崎が還るべき最後の地は鷺津小学校であった。牧野と宮崎が9月11日午前9時ごろに鷺津駅に到着する見通しを受け、鷺津町役所では8日に「緊急區長會を開いて歓迎方法を協議した結果列車到着と同時に花火を打揚げて町長以下町民驛頭に並んで歓迎し兩選手を先頭に立て、旗行列を行つて小學校に至りこゝで歓迎式を行ひ大國旗を掲揚して十二時から祝宴會を開き二時から再び旗行列を行つて諏訪、八幡兩神社に優勝報告、感謝の参拝をなす筈で夜は午後八時小學校に青年團その他全町民集合して提灯行列をなす事」¹¹⁰⁾となった。鷺津町を挙げての歓迎式である。そして、その場所に選定されたのは鷺津小学校であった。鷺津小学校は、鷺津町の人々が集まる場所なのである。顧みれば、牧野と宮崎が最初に背負った代表は鷺津小学校なのである。

9月11日午前8時半には、「すでに驛前は歓迎の群衆で身動きの出来ない程」であり「母校鷺津小學校の全生徒を始め青年團員外各種團體員手に手に小國旗を打振つて沿道に堵列」¹¹¹⁾していた。ここには、牧野と宮崎の小学生時代の校長である社本の姿もあり、「十年前お母さんに手を引かれてこの學校の門をくぐつてきた二人の一年生があつた、それが今こうして大きくなり立派に成功した二人なのです、皆さん有難う御座ります、私は胸が一杯でもう何んにもいふことはありません、こんなうれしいことはありません」¹¹²⁾と言った。この時の3名を収めた写真がある。そして、宮崎

が牧野との思い出を語る一節に以下のものがある¹¹³⁾。

「自分が育てた日本一の児童を、満面の喜びでクシャクシャにして迎えてくれた社本校長先生のあの顔は、二人がロスアンゼルス・オリンピックでがい旋して母校に帰って来た時と共に今でも忘れることはできません。ロスアンゼルスより帰った時は、盛大な全校生徒の歓迎式典を催していただき、二人の仲よく並んだ写真は今でも鷺津小學校の校長室に飾られています。これも歴代の校長先生が社本先生のご遺言を守り、二人の偉業を顕彰してくれている賜ものと思っております。」



図4 鷺津小學校創立百周年記念事業推進委員會編『窓をあけてごらんよー學校創立100年記念ー』湖西市立鷺津小學校、1976年、p.16.

二人が水泳を始めるきっかけをつくった社本校長、二人が育った鷺津小學校、二人が暮らす鷺津町、二人を知る鷺津町民にとって、牧野と宮崎は日本代表であり、同時に鷺津町あるいは鷺津小學校の代表でもあった。鷺津町の鷺津小學校に集った人びとが共有しているのは、皆が鷺津町民ということである。牧野と宮崎は、鷺津町民であり、鷺津小學校で育ったのである。二人は、鷺津小學校に戻り立った時、そこでの記憶が鮮明に思い起こされたのではないだろうか。場所こそが人びとの記憶を想起させるのであり、自らのアイデンティティを再確認させる。日本代表選手は、歓迎

を受ける先々で「私」が何者であるのかを再確認するのであり、歓迎する側も「われわれ」が何者であるのかを再確認するのである¹¹⁴⁾。日本代表選手は、日本を代表する存在であるだけでなく、複層的な存在であり、様々な文脈のなかで代表されるのである。

もちろん、佐々木が論じたように個々のオリンピックはナショナルなものを表象する言葉を紡ぎ出す。確かに、日本代表を背負う時に感じる視線、かかる期待、浴びる言葉の一つひとつは、選手に重くのしかかる。1930年代にオリンピックが日本国内で人びとの関心を集め、国家戦略としての重要性が増したその只中では、日本代表選手の心情は絶えず揺さぶられる。発する言葉や日常生活の一つひとつには、日本代表意識が入り込み、それを内面化していくことになる。

しかし、本稿ではそれだけではない日本代表選手の複層的な代表意識を浮かび上がらせることを試みてきた。牧野と宮崎が水泳をはじめたのは、小学生の時であり、最初は鷺津小学校の代表選手として競技大会に参加したのである。彼らは、小学校、中学校、大学¹¹⁵⁾へと人生を歩むなかで、それぞれのフェーズでそれぞれの代表を担ってきたのだが、その活動を通して醸成されたそれぞれへ帰属する意識は日本代表になったときに忘れ去られてしまうものではない。日本代表として活動するなかで、郷里への意識も同時に強化されてくる。日本代表選手として泳いでいるまさにその瞬間にも郷里への意識を携えている。はじめに「私」が何者であるのかを授けた郷里こそは、日本代表選手が、「日本代表選手」になってもなお、「私」を突き動かすものの1つであることは確かなことであるのではないだろうか。

なお、冒頭で示したように、鷺津小学校の校歌はロス五輪から30年の時を経た1962（昭和37）年に当時の校長の山本祐一によって作詞されたものである。この校歌を作詞するにあたり込められた山本の思いは、まず探究されてよいものであるし、この校歌を歌った／聴いた者の思いも様々で

ある。それは、世代毎に別様になっていくはずである。成田龍一に倣って、戦争の記憶を語るさいに世代を前景化する体験と証言と記憶という3つの区分¹¹⁶⁾を念頭におけば、鷺津町におけるロス五輪の熱狂を当事者として体験した者、ロス五輪の熱狂の体験を当事者から伝え聞く者、ロス五輪の熱狂を聞くことのない者、として3つに分類できるかもしれない。また、ニーハウスが指摘するように、記憶の場としてのロス五輪における競泳の重要性は、その目覚ましい成功に基づくだけでなく、将来のための約束とともに現在として過去を創造したことを確かめるための基準枠組みとして出来事がもつ機能に見いだされもする¹¹⁷⁾。牧野と宮崎は、いかにして「母校の校歌になったオリンピック」になったのか、そしてまた、それは、いかにして語られるのか。鷺津小学校の校歌をめぐる牧野と宮崎の語られ方を紡ぎ出していくことが、今後の課題である。

〔付記〕本稿を執筆するにあたり資料収集の面については、湖西市立鷺津小学校と湖西市立図書館の方々から格別のご高配を賜った。記して感謝申し上げたい。また、本研究は「十五年戦争下のスポーツ政策に関する歴史学的研究」（JSPS 科研費20K19583）の成果の一部である。

註・引用および参考文献

- 1) 豊田佐吉は小学川尻学校であり、牧野正蔵と宮崎康二は浜名郡吉津村立吉美尋常小学校である。湖西市立鷺津小学校の名称や位置づけの変遷については、鷺津小学校創立百周年記念事業推進委員会編『窓をあけてごらんよー学校創立100年記念ー』湖西市立鷺津小学校、1976年を参照。
- 2) 鏡味明克と小田諒によれば、1986（昭和61）年までに静岡県内で開校された826の公立小中学校のうち、405校で富士山が歌われている（鏡味明克、小田諒「静岡県の校歌に歌わ

- れた地名の分布」『名古屋・方言研究会会報』第23号、2006年、pp.33-38).
- 3) 市村魁山「日本競泳發達史」『水泳』第13号、1932年、p.20.
- 4) 戦後の水泳界を生きた古橋廣之進も浜名湖で泳いでいた.
- 5) Andreas Niehaus. Swimming into memory: the Los Angeles Olympic (1932) as Japanese *lieu de mémoire*. In : Andreas Niehaus and Christian Tagsold (eds.). *Sport, Memory and Nationhood in Japan : Remembering the Glory Days*. Routledge, 2017. p. 30.
- 6) 佐々木浩雄「『日本代表』の誕生（1912-24）——オリンピックへの参加とスポーツの国家的意義」有元健、山本敦久編『日本代表論』せりか書房、2020年、p.79.
- 7) 小石原美保「日本人トップアスリートの『手記』——揺らぐアイデンティティとナショナリズムの変容——」土佐昌樹編『東アジアのスポーツ・ナショナリズム——国家戦略と国際協調のはざままで』ミネルヴァ書房、2015年、pp.47-73.
- 8) 佐々木浩雄「『日本代表』意識の醸成（1928-38）——オリンピック熱の高まりとナショナル・アイデンティティ」有元健、山本敦久編『日本代表論』せりか書房、2020年、pp.106-134.
- 9) 堀江耕造「回顧三十有一年」『水泳』第13号、1932年、p.24.
- 10) 浜一中・浜松北高水泳部百年史編『浜中 浜一中 浜松北高水泳部百年史』浜松北高水泳団、2000年、p.10;堀江耕造「回顧三十有一年」『水泳』第13号、1932年、p.24.
- 11) 堀江、前掲、p.24.
- 12) 堀江、同上、p.24.
- 13) 堀江、同上、p.24.
- 14) 市村魁山「競泳發達史」『水泳』第7号、1931年、p.11.
- 15) 浜名湾游泳協会編『浜名湾游泳協会のあゆみ——創立75周年記念誌』浜名湾游泳協会、1992年、p.10.
- 16) 堀江、前掲、p.25.
- 17) 堀江、同上、p.25.
- 18) 堀江、同上、p.27.
- 19) 堀江、同上、p.27.
- 20) 日本水泳連盟40周年史編纂委員編『水連四十年史』日本水泳連盟、1969年、pp.28-29.
- 21) 堀江、前掲、p.28.
- 22) 鷺津小学校創立百周年記念事業推進委員会編『窓をあけてごらんよ——学校創立100年記念——』湖西市立鷺津小学校、1976年.
- 23) 鷺津小学校創立百周年記念事業推進委員会編、同上、p.14.
- 24) 宮崎康二「『泳ぎっくら』からオリンピックへ」牧野正蔵追悼集編纂委員会編『牧野正蔵の思い出』牧野正蔵追悼集編纂委員会、1989年、p.58.
- 25) 宮崎、同上、p.57.
- 26) 宮崎、同上、p.58.
- 27) 牧野正蔵追悼集編纂委員会編『牧野正蔵の思い出』牧野正蔵追悼集編纂委員会、1989年、p.14.
- 28) 宮崎、前掲、p.59.
- 29) 牧野正蔵追悼集編纂委員会編、前掲書、pp.15-17.
- 30) 宮崎マサ子『奇蹟の担い手——宮崎康二の生涯』宮崎マサ子、2002年、p.4.
- 31) 「牧野君國際新記録を作る」『静岡民友新聞』1929年8月17日2面.
- 32) 日本水泳連盟40周年史編纂委員編、前掲書、p.79.
- 33) 清川正二「動物的『勘』を持った男」牧野正蔵追悼集編纂委員会編『牧野正蔵の思い出』牧野正蔵追悼集編纂委員会、1989年、p.109.
- 34) 堀江耕造「濱名灣を中心として」『水泳』第4号、1931年、p.7.
- 35) 松下喜一「見付中學が優勝した東海中等學校競泳大會」『アサヒスポーツ』第9巻第15号、1931年、p.10.
- 36) 日本水泳連盟40周年史編纂委員編、前掲書、

p.51. また、12の地域は1925年の総会で加盟地区の分け方を12から13に変更している(日本水泳連盟40周年史編纂委員編, 同上書, p.52).

³⁷⁾ 日本水泳連盟40周年史編纂委員編, 同上書, p.56.

³⁸⁾ 12の地域は1925年の総会で加盟地区の分け方を12から13に変更している(日本水泳連盟40周年史編纂委員編, 同上書, p.52).

³⁹⁾ 浜名湾遊泳協会のほか、岩手水泳協会、関東水泳協会、満洲体育協会、名古屋体育協会、大阪体育協会、小樽体育協会が加盟した(日本水泳連盟40周年史編纂委員編, 同上書, p.58).

⁴⁰⁾ 日本水泳連盟40周年史編纂委員編, 同上書, p.58.

⁴¹⁾ 日本水泳連盟40周年史編纂委員編, 同上書, p.81.

⁴²⁾ 中村哲夫「日本水上競技連盟を中心として(シンポジウム報告)」『体育史研究』第21号, 2004年, p.71.

⁴³⁾ 田畑政治「オリンピックを目指して」『水泳』創刊号, 1930年, pp.2-3.

⁴⁴⁾ 水連による競技大会の在り方の変更については、具体的に次のようなプロセスを辿ったようである。「現在我が水泳界の一流選手は全部學生であり然も大學専門學校級の選手は全力をインターカレッジイトにこめ、中學級の先週は全力をインターカレッジイトにこめ、中學級の選手はその力をインターミドルに注いでゐる様な状態にある。

従つて各々その最上のコンディションをそのミートの時期をめざして作り上げる、前者の大會は秋であり後者の大會は眞夏である。それがため全國精鋭が同一大會で相會することは不可能であり、又事實上常に季節外れか或は初めの外征選手豫選會に於てのみ限られてゐた。

元來我が水上競技会の發達は學生聯盟の勃

興に端を發し、その母校愛のために現在の如き隆盛を來したと云つても過言ではないのである、從來の如き意義少なき全日本選手權大會の發達しないのも宜なるかなである、全國大學専門學校中等學校その他の一流が全日本大會を目指して最善を盡くして戦ひ互に大なる刺激を受け合つてこそこの大會の意義があり又延いては我が水泳界に現在以上超速の發達を望み得るのである、以上の如き事實に鑑みて聯盟に於ては昨年八月の全日本選手權大會及秋の明治神宮大會を以て極東の第一次豫選としたのであつた」。小林榮三「全日本選權大會に尽きて」『水泳』1930年, 創刊号, p.4.

⁴⁵⁾ 「時事言」『アサヒスポーツ』第8巻第15号, 1930年, p.6.

⁴⁶⁾ 「ニュース 日米對抗-愈々米國に挑戦」『水泳』第2号, 1930年, p.16.

⁴⁷⁾ 「會報 日本水上競技聯盟」『水泳』第4号, 1931年, p.2.

⁴⁸⁾ 田畑政治「オリンピックを目指して」『水泳』創刊号, 1930年, pp.2-3.

⁴⁹⁾ 田畑政治「多忙の一年」『水泳』第3号, 1930年, p.14.

⁵⁰⁾ 「會報 日本水上競技聯盟」『水泳』第4号, 1931年, p.2.

⁵¹⁾ 医学博士の太田正隆は「競泳選手と合宿」と題する論考を『水泳』に掲載している(太田正隆「競泳選手と合宿」『水泳』第9号, 1931年, pp.29-30). これは、水泳の日本代表の練習に医科學的な研究成果が応用されていたことを示唆している。

⁵²⁾ 松澤一鶴「日本チーム合宿練習機 日米對抗水上競技」『水泳』第8号, 1931年, pp.22-23.

⁵³⁾ 松澤一鶴の指導法への選手からの見解については高石勝男「日米戦を顧みて」『水泳』第8号, 1931年, pp.19-20を参照。高石は、松澤の指導について必ずしも好意的に受け止めていなかったようである。

- 54) 松澤一鶴「日本チーム合宿練習機 日米對抗水上競技」前掲, p.23.
- 55) 松澤一鶴「日本の水泳選手共通の缺點－偏りもスピードを第一に」『アサヒスポーツ』第10巻第3号, 1932年, p.20.
- 56) 松澤, 同上, p.20.
- 57) 宮崎康二「リレーが齎した自信で」『アサヒスポーツ』第9巻第19号, 1931年, p.9.
- 58) 牧野正蔵「武村君の力闘に勵されて」『アサヒスポーツ』第9巻第19号, 1931年, p.10.
- 59) 田畑政治「多忙の一年」『水泳』第3号, 1930年, pp.12-13.
- 60) 田畑, 同上, pp.12-13.
- 61) 「濱名灣を中心として」『水泳』第4号, 1931年, p.7.
- 62) 記録員編「明治神宮水泳場完成記念 日米對抗水上競技大會」『水泳』第8号, 1931年, p.3.
- 63) 松澤一鶴「勝った！だが陶醉は禁物 來年を目指して一層の精進を」『アサヒスポーツ』第9巻第19号, 1931年, p.7.
- 64) 飯田光太郎, 杉本傳え, 藤田明「オリンピックへの期待を倍加した水上競技」『アサヒスポーツ』第9巻第26号, 1931年, p.32.
- 65) 宮木正常編『第六回明治神宮体育大会報告書』明治神宮体育会, 1932年, pp.77-116.
- 66) 「會報」『水泳』第9号, 1931年, p.56.
- 67) 松澤一鶴「合宿練習記 男子競泳候補者」『水泳』第10号, 1932年, p.17.
- 68) 松澤一鶴「オリンピック水泳候補選手の第二次合宿練習を顧みて」『アサヒスポーツ』第10巻第9号, 1932年, p.17.
- 69) 松澤一鶴「合宿練習記 男子競泳候補者」, 前掲, p.18.
- 70) 牧野正蔵「レコードを好敵手としてアルネボルグは出ないが何處にどんな強敵が出るか判らぬ」『アサヒスポーツ』第10巻第7号, 1932年, p.11.
- 71) 宮崎康二「バラニーとコジヤツクこの二人を警戒, ハウランドとカリリ弟には自信がある」『アサヒスポーツ』第10巻第8号, 1932年, p.13.
- 72) 「選手を激勵する鳩山文相」『水泳』第11号, 1932年, p.17.
- 73) 宮崎, 前掲書, 1989年, p.60.
- 74) 松澤一鶴「人事を盡して世界制覇へ」『水泳』第12号, 1932年, p.3.
- 75) 「オリンピック選手消息片々」『水泳』第13号, 1932年, p.13.
- 76) 同上, p.13.
- 77) 同上, p.13.
- 78) 同上, p.13.
- 79) 同上, pp.13-15.
- 80) 同上, p.16.
- 81) 『第十回オリンピック畫報』興文社, 1932年, p.13.
- 82) 「水垢離とつて鷺津の應援 牧野, 宮崎兩選手を生んだ町全町舉げて熱心に」『静岡民友新聞』1932年7月31日2面.
- 83) 日本水上競技聯盟「オリンピック水上競技戦績」『水泳』第14号, 1932年, p.5.
- 84) 「宮崎牧野兩選手を生んだ鷺津町この頃の緊張ぶり」『静岡民友新聞』1932年8月5日夕刊1面.
- 85) 日本水上競技聯盟「オリンピック水上競技戦績」, 前掲, pp.5-7.
- 86) 「花形・宮崎君の働きに鷺津町をめぐる熱狂ぶり」『静岡民友新聞』1932年8月8日2面.
- 87) 『第十回オリンピック畫報』興文社, 1932年, p.38.
- 88) 「大喜びの濱一中」『静岡民友新聞』1932年8月9日夕刊1面.
- 89) 「牧野選手の父君が宮崎君宅で祝辞辭 故郷は熱狂的昂奮」『東京朝日新聞』1932年8月9日夕刊2面.
- 90) 同上.
- 91) 同上.
- 92) 同上.
- 93) 浜一中・浜松北高水泳部百年史編, 前掲書, p.193.

- 94) 「牧野選手優勝を待つて鷺津町のスポーツ祝ひ」『静岡民友新聞』1932年8月10日2面.
- 95) 「仕事も何も手に付かず『正蔵にも勝たせねば』と毎日遠くまで神佛に祈願して歩く熱心な牧野選手のお父さん」『静岡民友新聞』1932年8月11日2面.
- 96) 日本水上競技聯盟「オリンピック水上競技戦績」『水泳』第14号, 1932年, p.8.
- 97) 「おめでたう！を牧野選手の嚴父へ 近所の人たちも駆けつけて」『静岡民友新聞』1932年8月13日夕刊1面.
- 98) 「さあ今度は決勝だ どうしても一着を 豫選通過の報に鷺津町内は狂気亂舞の有様 待つ！牧野選手の快報」『静岡民友新聞』1932年8月13日夕刊2面.
- 99) 『第十回オリンピック畫報』興文社, 1932年, p.46.
- 100) 「郷土の皆様の御後援に感謝 更新を誓ふ牧野君」『静岡民友新聞』1932年8月15日2面.
- 101) 「勝報！郷里の歡喜！出場の刻, 深夜に濱邊で水垢離とつて祈願 驚異的記録の報に牧野選手の宅の喜び忽ち押寄す感激の潮」『静岡民友新聞』1932年8月15日2面.
- 102) 「花火を打揚げ 萬歳絶叫 けふ午後旗行列」『東京朝日新聞』1932年8月14日5面号外.
- 103) 「驛前に大アーチを造り各戸國旗を掲げて歡迎記念品を贈呈し夜は盛大な提灯行列を催す兩選手が歸るの日と鷺津町」『静岡民友新聞』1932年8月16日2面.
- 104) 「喜びの鷺津町全町民熱狂 宮崎, 牧野兩選手の凱旋と記念事業の數々」『静岡民友新聞』1932年9月7日2面.
- 105) 「時事言 オリンピックに對する國民の關心」『アサヒスポーツ』第10巻第19号, 1932年, p.7.
- 106) 「故國の第一夜を病床の宮崎 兩親の懷に抱かれて元氣なだゝッ子振り」『東京朝日新聞』1932年9月9日7面.
- 107) 「鷺津町の歡迎」『静岡民友新聞』1932年9月7日2面.
- 108) 「喜びの感想 丸で神宮プールの通り 牧野君語る」『東京朝日新聞』1932年8月14日3面号外.
- 109) 浜一中・浜松北高水泳部百年史編, 前掲書, p.194.
- 110) 「湖畔の町, 鷺津不夜城と化さん 我が生んだ兩勇者を迎ふる喜び 歡迎準備は全く成る」『静岡民友新聞』1932年9月10日2面.
- 111) 「湖畔の町, 鷺津に渦巻く感激の嵐 我が生める水の覇者宮崎牧野兩選手を迎へて 全町を擧げてのこの熱狂」『静岡民友新聞』1932年9月12日2面.
- 112) 同上.
- 113) 宮崎, 前掲書, 1989年, p.59.
- 114) 日本代表選手にとって「私」が何者であるかが色褪せつつある文脈については下竹亮志「代表という身体の生産——国策としてのエリートアカデミー」有元健, 山本敦久編『日本代表論』せりか書房, 2020年, pp.214-235が参照されてよいように思う.
- 115) 牧野は早稲田大学, 宮崎は慶應義塾大学にそれぞれ進学して水泳部に所属し, 早慶戦で相まみえることになる.
- 116) 成田龍一『「戦争経験」の戦後史—語られた体験／証言／記憶 増補』岩波書店, 2020年.
- 117) Andreas Niehaus. op.cit. 2017. p. 29.

(受理日：2021年4月6日)